

A-③：医療/教育

15：05-15：25

講演名：質の高い「Plain Language」構築のためにすべきこと

スピーカー：五十嵐 小優粒

国際医療福祉大学 国際交流センター 助教



日本語教師歴 15 年目。専門は日本語教育、対照言語学。国内外の教育機関で日本語・日本文化を教えてきた。現在の所属先では学部と大学院の留学生を対象に医療現場でも活用できる日本語を教授する。近年は「やさしい日本語」講師としても活動している。

講演サマリー：本発表では、日本語の構造や口語特有の省略表現を例にとり、Plain Japanese 構築の困難さについて述べる。文法的規範から外れた言語使用は、他の言語にも存在する。Plain Language の構築ではタブーとなるこれらの表現を、各言語話者が意識的に排除せねばならない必要性和重要性に言及する。

15:30-15:55

講演名：外国人診療におけるコミュニケーション

スピーカー：南谷 かおり

りんくう総合医療センター 国際診療科 部長
大阪大学 招へい准教授



11 歳で渡伯し、ブラジルと日本の医師免許を取得。2006 年～現在りんくう総合医療センター国際診療科部長、2013～2019 年大阪大学医学部附属病院国際医療センター副センター長、大阪大学大学院医学系研究科国際・未来医療学講座特任准教授。国際臨床医学会認定医療通訳士や日本国際看護師の育成にも従事。

講演サマリー：診療における会話は、日本人患者でも内容を完全に理解するのは難しい。それが日本語の通じない外国人患者となると、ハードルはさらに増す。たとえ医療通訳士を介しても、医療者の説明が難解では訳出も難しい。また、外国人の場合は言葉が通じて文化や常識が異なるため、さらなる配慮や工夫が必要である。

16:05-16:25

講演名：安心・信頼関係構築に寄与する思いやりのあるプレイン&ボディランゲージが患者満足度向上に不可欠である

スピーカー：大木 隆生

東京慈恵会医科大学 外科学講座 血管外科
Chairman（統括責任者）・教授



1987 年東京慈恵会医科大学卒。医学博士。米 Albert Einstein 医科大学外科学教授を経て、慈恵医大外科チェアマン、血管外科教授。「Best Doctors in NY」（2004-2007）、「米国で認められた日本人 10 人」（Newsweek 日本版）、NHK プロフェッショナル、安倍内閣未来投資会議民間議員などの経歴と多数の特許を有する血管外科医。現日本外科学会会頭。

講演サマリー：医療用語で患者に対する病状説明などをムンテラと言い、日常的に使われている。これはドイツ語の Mund（口・言葉）therapy が語源であるが端的に医療者の言葉の重要性を物語っている。近年、ムンテラに代わってインフォームドコンセントがほぼ同義語として汎用されているが同時に難解な言葉が乱用され、肝心の「思いやり」が軽視されてきた。病院を

訪れる患者は助けを求めにきているのであり、ビジネスシーンと違ってそこに必要なのは患者の不安を払拭し信頼関係構築に寄与する「思いやり」のあるボディランゲージとブレインランゲージ、つまりムンテラであり、医療者のアリバイ作りにもなる難解なリスク説明中心のインフォームドコンセントではない。演者の日米での外科医としての経験からブレイン・ボディランゲージの重要性を紹介する。

16 : 30-17 : 10

大木 隆生 氏と南谷 かおり 氏との対談

モデレータ : 五十嵐 小優粒 氏